

## 分科会報告

### 指定都市 PTA 情報交換会 第 1 分科会

2 部構成

第一部

テーマ 組織運営 PTA のあり方、

PTA のリーダーとしての役割

講師 上野正直先生

熊本市立必由館高等学校校長

①大事な事は話し合うのではなく、直接会って語り合うこと。

②虫の目、鳥の目、魚の目を持つ。

「虫の目」は、複眼です。つまり「近づいて」さまざまな角度から物事を見る。

「鳥の目」とは、高い位置から「全体を見回して」見る。

「魚の目」とは、潮の流れや干潮満潮という「流れ」を見る。

→特に魚の目、現役学生が世の中の流れを読む目が必要で、感性と五感が大切。

熊本市では高校生が熊本市長に教育内容の改革や希望を提案している。

→日本の学生は、数学や科学については 15 歳までは世界でもレベルが高いが、記述や表現、説明力が苦手。

言える人、記述できる人になるには、自ら探求する必要がある。

文系と理系に分けるのは、日本と韓国のみ。マサチューセッツ大学に入学しても、美術、音楽の勉強したりする学生も多く、世界を見ても興味あることに探求していく必要がある。

③出会う、つながる、を共に作る。

→これは、PTA Well -BEING (個人や社会の良い状態)。理念が大切。リーダーを楽しもう。

④「PTA 汽水域 (きすいいき)」

通常、海水と淡水が混ざり合う場所を示す。

PTA の活動は、異なる文化や考え方が交わる場として PTA が機能すること。たとえば、学校や家庭、地域社会の間で異なる立場や意見が共存し、調和していく場所としての役割を果たす。

⑤リーダーとしては、以下のマネジメントも必要。

アンガーマネジメント

するべき。→これがもう限界だよ。

と言うような考え方も必要な時もある。

ストレスマネジメント

今の自分とこれからの自分、持続可能な社会の作り手になっていこう。

第二部

PTA 裁判を振り返る。

岡田行雄 熊本大学法学部教授

小学校での PTA 会長である法学部の教授が訴訟され、最終福岡高等裁判所まで行き、和解により決着をした内容を披露。

① 訴訟リスク軽減に向けて、

入会の承諾による入会制度の確立 会員を孤立させない

非会員の子供を差別しない 書面など記録を必ず残す PTA における合意形成手続きの重要性

② PTA の訴訟リスク大きく 3 つあり。

@会費に関わる部分 @役員決めの決定方法

@会計係や事務係がお金を出さず出さないを小額でも勝手に判断

上記が実際に多くの訴訟原因。訴訟されるとが失うもの大きい。

憲法 32 条

何人も、裁判所において裁判を受ける権利を奪われない。

→誰にでも、公平な裁判所に提起する権利がある→誰もが PTA に対して訴訟を提起する権利がある。

③改めて PTA 活動の今後のあり方を考える。

PTA は、あくまでも社会教育団体であり、PTA の活動が好きな人の集まりになっていき、会員数は減っていくという流れ。絶対に無理やりやらせない、やりたい人がやる

文責：中村会長

## 指定都市 PTA 情報交換会 第4分科会

(講師)

・ICT 活用の観点3つ

- ①業務の効率化を図る目的
- ②組織内のコミュニケーションを取りやすくする
- ③苦手な人を取り残さない工夫をする

・学内管理の方法についての講義内容もあったが、学校内・教員間の問題なので、共有事項はない

・堺市は市 P で統一的なアプリ (スクルレ) を導入して単 P に使用してもらっている

(グループワークにて)

・横浜市は全ての学校が同じアプリを導入し、学校からの保護者あてのお知らせだけでなく、教育委員会からの保護者あてのお知らせも直接届く、そのため、市内の学校全体全体として相当な省力化が達成された

・熊本市も同じシステムを導入した

→ (藤田) 教職員の負担軽減のため、市には市内全校でアプリの統一化とのお知らせの直接配信を実現してもらいたいと感じた。

(広島市 P T A)

・市 P から単 P にメールアドレスを付与してそのアドレスに市 P から単 P へのお知らせを送るようにしている

→ (藤田) 新年度の事務局の労力削減や、単 P も問い合わせ用のメールとして使えるのでメリットがある。単 P で Google アカウントを作成しても二段階認証の携帯番号に会長の番号等を登録すると結局会長しか使えない。あとは費用対効果の問題。

## R6 指定都市 PTA 情報交換会記念講演 田中信一郎先生

・自分が必要とされていないと、感じている子供が多い

・X で SOS を出すと、たくさんの、「偽の」受け止める人間が出てくる、そこに引かれていき被害に遭う

・子供が周りに相談できない理由の一番は、心配をかけられないというものだった(統計)

・人は誰しも誰かの役に立ちたいものなので、一方的に支えられるだけで役割が固定されると元気がなくなる。

・話を聞く、と、言うとおりにする、は違う。言うとおりにするのは甘やかし。話は聞く必要がある。

・自暴自棄になれば、悪い結果になったらそれまでだ、と考えてしまうので、危険なごとの危険性を伝えるだけでは十分ではない。

・いのちが大事、と伝えることは必要だが、つらさが勝れば相対的につらさよりいのちが軽くなってしまふ。

・子供には、つらさを一緒に受け止める存在が必要である。自分は辛いと感じている、ということを知っている人がいるだけで、その子の力になる。辛さの量は変わらなくても、それを共有してもらっていることが、辛さの体感温度を下げる。

・問題解決する主役は本人。もやもやした感情を抱えている子に話を聞いていっても、本人にも分からないので形にならない。それを、解決するのではなく、受け止める存在が必要。愚痴は吐き出させる。

・子供は他者との関係性の中で育つので、「私のクラスの生徒」「私の子供」ではなく、私達の生徒、私達の子供、と、主体を「our」に転換する必要がある。

・子供のことを学校が背負い込むので事故を起こす。目的は子供のため。だから、目的のために共有して連携する。

文責：藤田副会長